2022年10月9日 聖霊降臨節第 18主日礼拝（神学校日）

メッセージ「もうダメだ、では終わらない」　　牛田匡牧師

聖書 創世記 32章23-33節

10 月に入って、先週から急に寒くなってきました。日中は残暑が長かったのですが、いよいよ秋本番というところでしょうか。秋というと「実りの秋」、食卓にも様々な秋の味覚が並ぶ季節です。しかし、この 10 月には、そのように喜ばしいことばかりではなく、あまり嬉しくないこととして、様々な物の更なる値上げがありました。

ロシアのウクライナへの軍事侵攻が始まってから、両国の農産物の生産も、輸出も滞り、その他の世界の物流も滞り、世界中で激しいインフレが起きています。日本だけはインフレ抑制が続いていますが、それでも食料品、電気ガス、ガソリン、衣料品など、生活に必要なあらゆるものの値段が、少しずつ上がり続けています。お給料が増えない中、支出だけが増えています。介護保険料も改訂され、人によっては 1 割負担だったのに、2 割負担になったという人もいます。これから先の社会がどうなっていくのか、先の見通しが立たない中、不安ばかりがつのっていく……。今や社会全体がそんな閉塞した雰囲気に飲まれてしまっているような気がします。これから世界はどうなっていくのか……。

それこそ、ロシアとウクライナは戦争をどうやって終えるのか。核兵器が使用されたら、世界はどうなるのか。また変異を続けている新型コロナウイルスも、今後は強毒化していかないのかなど、考え出すとキリがなく、もう考えること自体を投げ出してしまいたくなるような、それこそ「もうダメだ」と言ってしまいたくなるような、そんな状況です。とはいえ、人類の歴史を振り返ってみると、そもそも順風満帆で平和だった時代などはほとんどなく、むしろいつでも「もうダメだ」というような大変な時代の連続だったのではないでしょうか。また私たち一人一人のこれまでの歩みも、振り返ってみると、「色々と大変なことがありながらも、いや、むしろ大変なことばかりだったけれども、巡り巡って、不思議なご縁で今があります」というのが、多くの人の実感なのではないかと思いますが、いかがでしょうか。

さて「もうダメだ」「どうしたらよいか、分からない」というような人は、聖書の中にももちろん登場します。人間の美しい部分だけではなく、醜い部分、どうしようもない部分も含めて記されている聖書は、何千年という時代を超えて、21 位世紀の今もなお私たち自身の姿を映し出してくれる鏡です。今回のお話は「ヘブライ語聖書」の冒頭『創世記』の中から、ヤコブ物語でした。古代イスラエル民族の父と呼ばれるアブラハム、その息子イサク、さらにその息子ヤコブと、お話は順番に語

られていますが、そのヤコブの物語です。
今回の 32 章を読むためには、そこに至るまでのヤコブ物語のあらすじが必要です。まず初めにアブラハムの息子のイサクとその妻リベカの間には、エサウとヤコブという双子の息子がいました。二人は性格も大分異なっていましたし、父親のイサクは兄のエサウをかわいがり、母親のリベカは弟のヤコブをかわいがっていました。やがてイサクは歳を取り、自身の財産の相続についてきちんと話を付けようとします。当然、双子とはいえ長男であるエサウの方に特権がありました。
イサクは大好きな息子エサウを呼び寄せて「遺産相続の話をしたいから、狩りに出て、獲物を射止め、お父さんの好きな料理を作って食べさせてくれ」と言いました。それを盗み聞きしていたのが母親のリベカです。彼女はエサウが野に出かけていくや否や、ヤコブの所に来て事の次第を伝えました。ヤコブが今から狩りに出かけても名人のエサウには勝てませんから、彼は自分の家の家畜小屋から子山羊を連れ出して来て、それをリベカが夫の好みに合わせて調理して持っていきました。既に目が見えなくなっていたイサクは、料理を運んできた声がヤコブなので、不思議に思い、手で触って確かめようとします。エサウは毛深く、ヤコブの肌は滑らかでした。したたか者のリベカはヤコブの腕に子山羊の毛皮を巻き付けておきましたので、イサクはそれを触って目の前にいるのはエサウだと完全に信じ込み、ヤコブの持ってきた料理を食べて、ヤコブを祝福し、遺産相続を約束しました。
ほどなく本物のエサウが獲物を取って帰宅し、ご馳走を作って父イサクの所にやって来ます。そしてイサクもエサウも、ヤコブにしてやられたことに気づきます。エサウは激しく怒り、「父親が死んだら弟も殺してやる」と口走りました。それで心配になった母リベカは、ほとぼりが冷めるまで、何百キロも離れた自分の実家にヤコブを避難させました。（創世記 27 章）
さて、ヤコブは母の実家である伯父ラバンの下で、故郷に帰れる日を待ちながら、やがて 20 年の日が経ってしまいました。ついに我慢が出来なくなった彼は、伯父の下から夜逃げしました。20 年前、着の身着のまま、命からがらで逃げてきたヤコブは、今や二人の妻、11 人の息子、何十人の召し使いや何百頭もの家畜を連れて帰ってきました。しかし、20 年が経ったとはいえ、兄エサウが今もどのように思っているかは分かりません。「まだ自分のことを殺そうと思っているかもしれない……」。ヤコブにとっては不安しかありません。そのためヤコブは、エサウをなだめるために、自分より先に合計 550 頭もの家畜たちを、召し使いたちと共に「エサウへの贈り物」として行かせました。それらの贈り物を見てもらった後で、顔を合わせれば、きっと赦してくれるのではないか。それがヤコブのこらした工夫でした。
そして、いよいよ今回の 32 章 23 節です。「これでやるべきこと、今できることはやった。あとは夜が明けて川を渡るだけだ」というはずでしたが、彼はなぜか夜中

に起きて、家族や召使いたちに夜の川を渡らせました。なぜ彼はたった一人だけで川に残ったのか……。詳しいことは何も書かれていません。ここまで来て怖気づいた、やはりまだ迷っていたのかもしれません。しかし、そこで彼は突然見知らぬ一人の男から襲われました。夜中に一人で寝ている所を襲われたら、たまったものではありません。激しい取っ組み合いになったのでしょう。「夜明けまで格闘した」（25 節）とありますので、時間的にも随分長かったのだろうと思います。26 節では「その男は勝てないと見るや」とありますので、ヤコブの方が優勢だったのでしょうか。27 節では男の方が「放してくれ、夜が明けてしまう」と叫びますが、ヤコブはその手を放さず、「祝福して下さるまでは放しません」と言い張りました。

何とも不思議なお話です。夜中に寝ている所を強盗に襲われたら、闘って、やっつけたり、追い返したりしたらおしまいです。なのに、ここでヤコブは自分を突然襲ってきた相手に対して「祝福してくださるまで放しません」と言っています。ヤコブはこの相手が神の使いだと分かっていたのでしょうか。すると次に男は「あなたの名は？」と尋ねました。彼が「ヤコブ」と答えると、「あなたの名はもはやヤコブではなく、イスラエルと呼ばれる」と言いました。「ヤコブ」という言葉は、「かかと、陰謀をたくらむ者、一杯食わせる者、乗っ取る者」を意味していましたが、それは兄を騙して出し抜いてきたという彼のこれまでの生き方を示すものでもありました。

その彼が「イスラエル」と名前を変えるように言われました。「イスラエル」という言葉の語源には、「神が支配したもう」「神が守りたもう」、「神が闘いたもう」など、色々な説がありますが、ここではヤコブが「神と闘った」から、イスラエルと呼ばれるのだ、と理由づけられています。これは古代イスラエル民族が自分たちの民族名となった「イスラエル」という言葉の、名付けの物語、命名譚として語り継がれていたものだったのでしょう。

「人を騙し、欺く者、ヤコブ」から、「神と闘い、神が守りたもう人、イスラエル」へと名前が変わったヤコブは、名前だけではなく、その生き方全部が変わった、神様との出会い、格闘によって変えられたと言うことができるのではないでしょうか。続いて今度はヤコブが男に「あなたの名前を教えてください」と尋ねましたが、男は答えることなく、その場でヤコブを祝福しました。そしてヤコブはその男が神様であることを確信し、「私は顔と顔とを合わせて神を見たが、命は救われた」と言いました。「神は直接見ることができない。神の顔を見たら死んでしまう」と考えられていた中で、「私は顔と顔とを合わせて神を見た」「私が取っ組み合いをして、格闘していた相手は、紛れもない神様だったんだ」と確信した、ということなのでしょう。

そして 32 節ですが、ヤコブがその場所、ペヌエルと名付けたその場所を過ぎた時、「日は既に彼の上に昇っていた」は、元々のヘブライ語を直訳すると「太陽が彼のために昇った」です。20 年間に及ぶ逃避行の末、兄との再会を前に不安に

満ちていた中、夜通し見知らぬ男と格闘し、疲れ果て、さらには股関節まで痛めて傷ついていたにもかかわらず、夜明けとともに、彼、ヤコブ改めイスラエルの心の中は晴れやかになっていて、太陽さえも彼のために昇って来た、これから向かう兄との再会の道が明るく暖かく照らされているように感じた、祝福され、力づけられているように感じた、ということだったのだろうと思います。

かつて自分が兄を騙して、父の祝福を奪い、財産相続権を奪ったが故に、兄から命を狙われるようになったこと。20 年ぶりの再会を前にして、不安で不安で仕方なかったこと。自分として考えられる、なし得る限りの対策を講じたけれども、やはり最後の一歩を踏み出しきることができない。ヤボクの渡しを自分自身は渡りきることができない……。かと言って、一人で来た道を引き返すわけにもいかない。もうどうしたよいのか。もうダメだ……。そんな苦しい状況の中、ヤコブの祈りに応えて、神様の方からヤコブの所にやってきてくれました。目に見えないはずの神様が、目に見える形の人となって、見知らぬ男の姿となって現れ、互いに取っ組み合い、格闘し合える姿となって、関わってくれ、そして最終的には祝福をしてくれました。この物語は、私たちが思う「もうダメだ」では、まだ終わりではない、ということを示してくれる物語でもあります。

また目に見えない方が、目に見える姿となって、私たちの間に宿られ、私たちと深い関係を持たれたという、神の受肉、クリスマスに生まれたイエス・キリストの姿を予期させる物語でもあります。ヤコブは神様と出会い、祝福されて名前と生き方が変えられた代わりに、腰を痛めました。イエス様は鞭打たれ、たくさん傷つけられた後に、十字架につけられて、殺されました。しかし、命の神が共に歩まれている物語は、肉体の死では終わりません。イエス・キリストは、死から引き起こされました。そこに死を超える復活の命、「もうダメだ」では終わらない復活の命、命の神と共に歩む絶対の命があります。

様々な壁に阻まれ、閉塞感を感じ、息苦しさを感じる社会です。その中で信仰心があれば、不安や迷いがなくなるか、悩みがなくなるかというと、そんな単純なものではありません。ヤコブもそうでした。「もうダメだ」とも思える中で、それでも祈りながら、悩みながら模索しているその最中にこそ、神様との出会いがあり、神様との取っ組み合いの格闘がありました。そしてその末にこそ「やっぱり、この道でいいんだ」との確信、神様からの祝福が与えられたのではないでしょうか。

「箴言」19 章 21 節には、「人の心には、たくさんの企て／主の計らいだけが実現する」（箴言 19:21）という言葉があります。今日これからも、神様が共にいてくださいます。そしてそのことに信頼しながら、私たちは神様の大いなる計画の中に、一歩ずつ歩みを進めて参ります。